

# 「写真の開拓者」堀市郎の研究

——在外史料を中心として——

西島太郎

世が歩いた場所は、いまでも多くが当時の面影を残していた。

はじめに

## 一 堀市郎に関する新知見

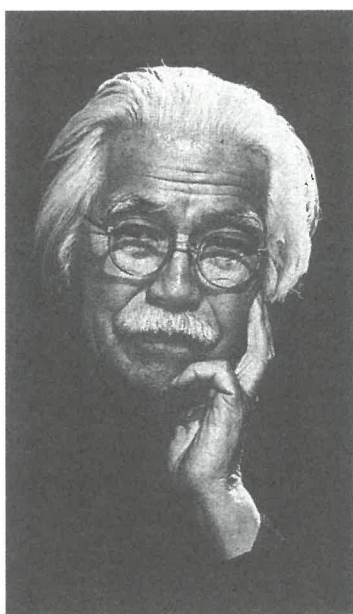
### 【1】晩年の堀市郎肖像写真

最初に掲載するのは堀市郎の最晩年の肖像写真である。COG創立50周年記念委員会編『チャーチ・オブ・ゴッド 50年のあゆみ 前のものに向かって』（チャーチ・オブ・ゴッド刊、二〇〇一年、一七頁）に掲載されるもので、実物はチャーチ・オブ・ゴッド川崎教会にある。掲載に当たり、チャーチ・オブ・ゴッド川崎教会および堀智子氏より許可をいただいた。記して謝意を表する。

本稿は、松江歴史館で開催された平成二四年企画展「松江藩士の息子画家になる。孫写真家になる。——野口英世の親友 堀市郎とその父樺山——」閉会后、新たな知見をまとめた拙稿「堀樺山・市郎父子に関する新知見——展覧会開催後の調査より——」（『松江歴史館研究紀要』三、二〇一三年三月）に続き、堀市郎（一八七九—一九六九）に関する知見を、主にアメリカの雑誌や新聞など英語圏における記事を中心にまとめるものである。

堀市郎は島根県松江市に生まれ、小泉八雲の影響もあり、上京後、アメリカへ渡り、ニューヨークで写真家として成功した人物である。五〇歳で帰国して後は、父の影響もあり、画家に転身し、写真活動は行わなかった。そのため市郎の写真家としての名声や、写真技術の進展に寄与した功績は、日本ではほとんど知られず、記憶されることもなかった。ニューヨークでは野口英世の隣室に住んだこともあり、英世に油絵道具を送り、絵画を教えた親友でもあった。

この度紹介する英字資料からは、市郎の海外での活躍がより詳細に明らかにできる。また市郎が活躍したニューヨークの現地調査も行った。市郎や英



【2】一九二〇年代の米国で最も洗練された写真焼き付けを行う人物

『Pacific Stars and Stripes (星条旗新聞 太平洋版)』(アメリカ) 一九五〇年四月一日(水)付、二面)

一九五〇年四〜五月にかけて、横浜と東京にあるアメリカの軍教育センターおよび横浜のニューグランドホテルで堀市郎の写真、油彩画、ミニチュアユア(細密画)を展示する展覧会が開催された。一九二九年に帰国の翌年、東京三越で「堀市郎氏洋画展覧会」が開催されて以来の大規模な展示で、洋画だけでなく、写真や細密画までも展示する。堀市郎の写真家、細密画家、洋画家としての側面全てを、展覧会という形で評価したのが、日本人ではなくアメリカ人であった点に、市郎の帰国後の日本における評価が示されている。この展覧会の詳細は、「軍事ニュースや世界のアメリカ軍施設情報を多く載せるアメリカの新聞『Pacific Stars and Stripes (星条旗新聞 太平洋版)』から窺うことが出来る。一九五〇年四月一日水曜日の記事は「AEC Will Hold Art Exhibition (軍教育センターは芸術展を開催する)」と題し、次の文書載せる(原文は英文。翻訳は全て西島による)。

YOKOHAMA—Two exhibits of works by Ichiro E. Hori, Yokohama Artist who spent more than a quarter-century in the States before 1930, will be hold at the Army Education Center here beginning April 17.

The first exhibit, to be held from April 17 to 22, will present photographic work by Hori from about 1919 to 1929, while he had a portrait studio on Fifth avenue in New York City. The photographs will include portraits of prominent personages of that era including Lady Diana Manners, Rabinadath Tagore, Vicente Blasco Ibanez,

Charles Dana Gibson, and a number of prominent Japanese. Another group will include pictures of ballet dancers Pavlova, Fokine, Novikoff and others. One section will be devoted to portrait studies of the well-known Japanese motion picture star, Sessue Hayakawa, taken when both he and Hori were in the States.

Also included will be examples of darkroom technique which made Hori known as the most accomplished printer in the U. S. during the 20s, and which caused major American photographic companies to send samples of their new paper to Hori for trial printing.

A group of four photos of draped nudes which created a stir when Hori displayed them at his Fifth avenue studio in 1919, also will be shown as a footnote to photographic pioneering.

A number of the photographs to be displayed were used in Vogue, Shadow Land, and other popular magazines of the era, and several in the exhibit also won prizes at photographic and art shows in the States. A number of them also reveal Hori's skill at oil coloring of printed photos.

The oil paintings to be exhibited the second week will include portrait miniatures and large canvases.

(翻訳) 横浜から。横浜の芸術家、一九二〇年以前にアメリカで四半世紀以上過ごした堀市郎の仕事の二つの展覧会が、四月一七日から軍教育センターで開催される。

四月一七日から二二日まで開催される最初の展示は、ニューヨークの五番街に肖像写真館を持っていた時期の、およそ一九一九年から一九二一

九年までの堀氏による写真の業績を公開する。写真は、その時代の著名な人物の肖像を含んでいる。レディ・ダイアナ・マナーズ、ラビーンドラナート・タゴール、ピセンテ・ブラスコ・イバニェス、チャールズ・ダナ・ギブソン、そして何人かの日本の著名人などである。もう一つのグループは、バレエダンサー・パブロワ、フォキネ、ノヴィコフ、その他の写真を含む。一つの部門は、有名な日本の映画スターである早川雪洲の肖像研究で、早川と堀がアメリカにいた時に熱心になされた。

また、一九二〇年代の米国で最も洗練された写真焼き付けを行う人物として知られた堀の、暗室技術の模範も含まれている。そしてその技術は、主要なアメリカの写真会社が試験焼き付けのために新しい印画紙のサンプルを堀へ送るといふ現象を引き起こした。

写真の開拓者たることを示すこととして、堀が一九一九年に五番街の彼の写真館で展示した、掛け布で覆われたヌード写真四枚は物議を醸した。展示されたたくさんの写真は、「ヴォーグ」「シヤドウランド」他、その時代の人気雑誌で掲載された。そして展示された数枚の写真も、アメリカでの写真展や美術展で賞を獲得した。そのことは、印刷された写真に油彩で彩色する際の堀氏の技量に見ることができる。

二週目の展示には、肖像ミニチュア（細密画）と大きなカンバスの油絵がある。

右記事からは次の点が明らかとなる。①市郎の展覧会が二つ開催され、一つは一九五〇年四月一七～二二日の五日間、横浜のアメリカ軍教育センターで開催されたこと。②市郎が、ニューヨーク五番街に肖像写真館を開いていたのが一九一九～二九年であること。③被写体のグループの一つは、著名人の肖像であり、レディ・ダイアナ・マナーズ（女優）、ラビーンドラナート・

タゴール（インドの詩人）、ピセンテ・ブラスコ・イバニェス（スペインの作家）、チャールズ・ダナ・ギブソン（イラストレーター）であり、日本の著名人もいた。④他のグループは、バレエダンサーのパブロワ、フォキネ、ノヴィコフ等である。⑤さらに日本の映画スター早川雪洲の肖像があり、早川と堀がアメリカにいた時にその肖像研究が熱心に行われたこと。⑥「一九二〇年代の米国で最も洗練された写真焼き付けを行う人物」が市郎であり、「暗室技術の模範」と著者は評している。そのため「主要なアメリカの写真会社が試験焼き付けのために新しい印画紙のサンプルを堀へ送るといふ現象を引き起こした」という。⑦一九一九年の堀写真館で展示された「掛け布で覆われたヌード写真四枚」は物議を醸し、堀が「写真の開拓者」であることを示す事件であったこと。⑧写真は「ヴォーグ」「シヤドウランド」他、人気雑誌に多く掲載された。アメリカでの写真展や美術展で賞を獲得し、写真に油彩する際の技量にあらわれていたこと。⑨二週目の展示には細密画と油絵が展示されたこと。

右の記事から、市郎の暗室技術が「模範」とされる腕前であり、ヌード写真により「写真の開拓者」とも評価され、写真会社からは印画紙の焼付けに意見を述べるまでになっていた事実は、全く新しい知見である。

【3】帰国後、横浜での油絵・肖像細密画展示（『Pacific Stars and Stripes（星条旗新聞 太平洋版）』（アメリカ）一九五〇年四月二四日（月）付、五面）

四月一日の記事の二三日後、二つ目の展覧会の記事が掲載された。タイトルは「Oil, Photographs Now on Exhibition（現在展示している油絵、写真）」で、絵画作品を中心とする展示である。原文は次の通り。

YOKOHAMA—A group of oil paintings by Ichiro E. Hori are being exhibited at the Army Education Center here, and a large group of photographs of historical interest are being shown at the New Grand hotel beginning Wednesday.

The oils went on exhibition Monday night and will be displayed through Saturday noon. They include a number of miniature portraits, many of which were exhibited almost 30 years ago at the National Academy in New York City while Hori was in the U. S.

The photographic exhibit, which will be placed in the New Grand on Wednesday, were shown at the Army Education Center last week when they were well received. They represent work done by Hori while he operated his photographic salon on Fifth Avenue. Since his return to Japan, Hori has worked solely with oils and is no longer engaged in photography.

(翻訳) 横浜から。堀市郎による油絵の一群は、このところ軍教育センターで展示している。歴史的関心の強い写真の大きな一群は、ニューグランドホテルにて水曜日から展示が始まる。

油絵は月曜夜に展示が始まり、土曜夜まで展示される。肖像細密画のいくつかも展示され、堀氏がアメリカにいた間のニューヨークのナショナル・アカデミーで二〇年前に展示されたものも多くある。

先週、軍教育センターでの展示が好評だったので、水曜日にニューグランドホテルで写真を展示する。五番街の写真サロンを取り仕切っていた時期の堀氏の仕事を再現する。彼が日本に帰ってきて以来の再現となる。堀氏はいっぱら油絵の仕事のみで、写真撮影には携わっていない。

内容は次の様である。①一つの写真展示が終った二日後の記事で、この日(二四日月曜日)から土曜の二九日まで六日間、油絵・肖像細密画の展示が軍教育センターで開催されたこと。②肖像細密画は、ニューヨークのナショナル・アカデミーで展示されたものもあること。③市郎の写真については、先に開催された軍教育センターでの展示が好評だったので、歴史的関心の強い写真の一群は、横浜にあるニューグランドホテルで二六日水曜日から開催されることとなったこと。④これは「堀氏の仕事を再現」した展示で、日本に帰ってきて以来初めての再現(展示)であること。⑤日本に帰ってきてからは油絵のみで、写真撮影はしていないこと。

【4】進駐軍のスケッチ教室講師 (『Pacific Stars and Stripes (星条旗新聞 太平洋版)』(アメリカ)一九五〇年五月一〇日(水)付、五面)

展覧会開催の翌月、市郎は、進駐軍のスケッチ教室の講師をとめた。

「Sketching Class Forming For Yokohama Students (横浜の学生のために開かれたスケッチ教室)」と題し、生徒の募集を呼び掛けた。

YOKOHAMA—A class in sketching for occupationnaires is being formed here under the instructorship of Ichiro E. Hori, Yokohama artist, whose paintings are now being exhibited at the New Grand Hotel.

Persons interested in attending the classes can obtain information as to time and place of meetings, cost of lessons and other pertinent facts by calling Yokohama 2-6665.

An exhibition of more than 100 photographs taken by Hori while he was in the States several decades ago was shown at the Army Education

Centers in Tokyo and Yokohama and at the New Grand Hotel. An exhibit of his work with oils on both large canvasses and in miniature has been held at the Yokohama Education Center and is to be held in Tokyo after the showing at the New Grand.

(翻訳) 横浜から。進駐軍のスケッチ教室は、横浜の芸術家々今、ニューグランドホテルで絵を展示している堀市郎講師のもとつくられたものである。

教室に関心のある人は、横浜二一六六五に電話することで開講の間、受講料、他の関連事項の情報を得ることができる。

堀氏が数十年前、アメリカにいた頃に撮影した一〇〇枚以上の写真の展示会は、東京と横浜の軍教育センターとニューグランドホテルで展示された。大きなキャンバスの油絵と細密画の両方の展示は、横浜の教育センターで開催され、ニューグランドホテルでの展示の後、東京で開催されることになっている。

ここから判ることは、①堀市郎を講師として進駐軍のスケッチ教室が開かれ、受講者を募っていること。②東京と横浜の軍教育センターでの展示のあと、横浜のニューグランドホテルでの展示があったこと。③これには一〇〇枚以上の写真作品が展示されたこと。④油絵と細密画は、横浜の軍教育センター、ニューグランドホテルで展示され、その後東京(恐らく軍教育センター)で展示される予定であること。

【5】市郎、自身のアメリカでの活躍を語る (『Pacific Stars and Stripes (星条旗新聞 太平洋版)』(アメリカ)一九五〇年七月一五日(土)付、一  
九面)

先の軍教育センターで開催された市郎の写真展を見た、米軍第八軍写真研究所のエドワードL・シェイバー大尉は、市郎に興味を示し、市郎を同研究所に招待した。市郎は米軍の最新の写真スタジオで遊ぶと共に、自身の過去を語った。タイトル「HORI Japanese photographer turned painter」  
By R. D. CONNOLLY (画家になった日本の写真家堀氏。R. D. CONNOLLY 執筆)とある。

THE SHORT, gray-haired man's eyes twinkled behind oval, steel-rimmed glasses as he viewed the wonders of a modern photographic laboratory. The Eighth Army photo lab was far different from the studio on New York's Fifth Avenue which he had owned years ago. During the '20s, the man, Ichiro E. Hori, was a prominent portrait and dance photographer in the States before he returned to Japan and his painting.

Hori's visit to the lab came as the result of an invitation extended by Capt. Edward L. Scheiber, Eighth Army photo officer, his assistant, 1st Lt. Arthur Jones and Sgt. Ruben Castro, portrait photographer at the lab. The three became interested in Hori after viewing his photographs exhibited recently at the Army Education Center.

The ex-photographer spent an entire day at the lab, examining equipment and methods with the eagerness of a child with a new toy. Hori, whose subjects have included such varied personalities as Anna Pavlova, Michael Fokine, Harcourt Algeranoff, Rabindranath Tagore, Charles Dana Gibson, Lady Diana Manners, and Mary Pickford, has paid little attention to the many advances made in the field of

photography since he gave it up to return here in 1929.

Hori was born in Matsue and at the age of 12 entered the employ of the local photographer, Morita.

At the age of 21, the fever of wanderlust gripped him "I led me to America, for me the land of promise."

In 1901, an ambitious young Japanese arrived in San Francisco. He found work in a small studio and later moved to the Miniature Portrait Company. Living frugally, he saved enough money and set out for the East. In 1904 he established what may well be the first home portrait business in America, in St. Louis.

A year later he accepted an offer to go to New York and join Bradley's, one of the city's leading studios. He remained with Bradley for a number of years. After free-lancing for a while, he opened his own studio at 665 Fifth Avenue in 1917.

Success was instantaneous and many notables came to his studio for portraits. But Hori, a painter by temperament, had his own goal - to make his photographs live. He was aided in this by such ballet artists as Pavlova, Fokine and Algeranoff who posed for him.

His photographic efforts paid "well" during his stay in New York, but there were several times when he found himself being asked to provide or take pictures outside the portrait field. Immediately after the earthquake which destroyed most of Tokyo and Yokohama in 1923, newspaper and magazine editors in the States were searching for photographs which would show the Kanto region as it had been

before the tragedy. One photographic agent called Hori to inquire if he had any photos available. Hori told the agent that he had no pictures, adding that the only thing he had in that line were some picture postcards which he had brought with him. The elated agent bought them all, about three dozen, for \$3 a postcard.

An incident with a reverse twist was photographing a Japanese garden on a Long Island estate. Hori had never taken a picture of a garden while in Japan, but agreed to the assignment mainly because it appealed to his sense of humor.

Hori had planned to publish a volume, of his dancing photographs during the late '20s and Fokine had written an introduction praising the photographer's work, but the volume was never published. Hori left it behind when he returned to Japan in 1929 but when the depression hit a few months later, the project was abandoned. The volume will never be published. The negatives which Hori had brought back to Japan with him and those which had been returned later from the States, were destroyed by a warehouse fire in 1940, leaving Hori only a few prints as a remembrance of his phenomenal photographic career.

Hori was not greatly perturbed by this loss. He had returned to Japan, "Hori the photographer," he averred, "is dead. I shall die a painter."

Even while in New York, he would close his studio each year during January and February and devote himself to oil painting. His

for photographs which would show the Kanto region as it had been  
 miniatures were accepted by the National Academy Exhibition in New  
 York in 1914, and many were accepted for exhibition during the  
 following years by the American Miniature Painters Society. He  
 brought back a number of oils which were exhibited at the Mitsukoshi  
 Art Gallery in 1929 and 1930. Since then they have been sold, along  
 with many others, including one of Mikimoto, familiar to many  
 Americans as the 'Pearl King.'

Hori admits that his early studies in painting aided him in  
 perfecting his photographic technique, and that his 40 years of  
 photographic experience have assisted him in capturing the  
 personality, character, and mood of a subject which he reproduces  
 on canvas.

Hori works in the Western style, both in landscapes and portraits.  
 However, he feels that many other Japanese artists who work in this  
 way are seriously handicapped by too little association with  
 Occidentals and thus are unaware of the differences in facial  
 contours which express moods and character.

At 70, an age when many other men are ready to retire, Hori is still  
 going strong as a painter. In his studio just off Motomachi, shopping  
 street through which tourists are shown on round-the-world cruises,  
 Hori continues to work in oils and to enjoy life.

Recently he permitted an exhibition of his photographs because of  
 their "historical" value, but he was much more interested in offers  
 to exhibit his oils and miniatures. Exhibits, all well-received,

January and February and devote himself to oil paintings. ...  
 were held at Aremy Education Centers in Yokohama and Tokyo and at  
 the New Grand Hotel in Yokoyama.

(㊦) HORI POSES for his portrait while Sergeant Castro prepares  
 to squeeze the bulb. This is reversing the position for the venerable  
 photographer-painter who spent so many years behind the lenses.

(㊧) TURN-ABOUT IS FAIR PLAY. Rumpole-haired Hori goes into action  
 with a portrait of Sergeant Castro during his visit to the 8th Army  
 Photo Lab.

(㊨) AFTER THIS VISIT to the Photo Lab, the group went to Hori's  
 studio in Motomachi where Hori showed them his almost-completed  
 self-portrait, his latest canvas.

(㊩) A MEMBER of the Pavlova company, English-born  
 Harcourt Algeranoff who took a Russian stage name. Taken in 1924.

(㊪) ANNA PAVLOVA, about 1924. The famous dancer and  
 members of her group were Hori's favorite subjects.

(㊫) ONE OF A NUMBER of studies made by Hori of Sessue  
 Hayakawa, famous Japanese actor while both men were in U. S.

(㊬) A TURKISH DANCER who posed for Hori In 1926. Dancers  
 are one of Hori's favorite subjects.

(㊭) AN EGYPTIAN DANCER Princess Noyta Noyka. Taken in  
 1925 during Hori's busiest period.

(㊮) A PORTRAIT that truly captures the mysticism of  
 Rabindranath Tagore, taken about 1924.

(㊯) A BALLET DANCER who posed often for Hori; taken

in 1922. Hori remembers her only as "Marceller."

(⑩下段左から4) ANOTHER STUDY of an Egyptian dancer, taken

in 1925. Most of Hori's clients were of the stage.

(翻訳) 短い白髪の男の目は、楕円形の鋼縁の眼鏡の後ろで輝いた。彼は、現代写真研究所の素晴らしさを見た。第八軍写真研究所は、彼が数年前に所有していたニューヨーク五番街のスタジオとはるかに異なっていた。帰国して画家となる前、一九二〇年代の堀市郎 (Tachiro E. Hori) は、肖像や踊り子を撮影する著名な写真家であった。

堀氏がその研究所へ来たのは、第八軍写真研究所のエドワード L. シェイバー大尉による招待によるもので、その研究所には大尉の助手であるアーサージョーンズ中尉と、研究所の肖像写真家であるルーベン・カストロ軍曹がいた。三人は、最近、軍教育センターで堀氏の写真を見て彼に興味を持つようになった。

元写真家は、研究所でまる一日を過ごした。そして新しいおもちゃで子供のような熱心さで機材とその扱い方を調べた。堀氏の被写体は、アンナ・パヴロワ、ミッシェル・ホキネ、ハルコート・アルジェラノフ、ラビンドラナート・タゴール、チャールズ・ダナ・ギブソン、ダイアナ・マナーズ、メアリー・ピックフォードのような様々な個性を含んだ。彼は一九二九年に帰国して以来、写真界の多くの進歩にほとんど関心を示さなかった。

堀氏は松江(前掲書)で生まれ、一二歳で地元の写真家森田氏に雇われた。

二一歳の時、放浪熱が彼を襲い「私が見込んだアメリカへと導いた」。一九〇一年に野心的な若い日本人は、サンフランシスコへと到着した。彼は仕事を小さなスタジオで見つけ、後にミニアチュア・ポートレイト

社へと移った。質素に生活し、彼はお金を貯めて、東海岸へ向けて出発した。一九〇四年、セントルイスにおいて彼は、おそらくアメリカで最初に家庭用肖像写真ビジネスの仕事を始めた。

一年後彼は、ニューヨークへ行って、ニューヨークで一流の写真スタジオであるブラッドリーと共に仕事をする申し出を受け入れた。彼は、多年にわたりブラッドリーと共にいた。しばらくフリーで働いた後に、彼は一九一七年に彼自身のスタジオを五番街の六六五に開いた。

成功はあつという間で、多くの名士は肖像写真のために彼のスタジオを訪れた。しかし画家の気質を持つ堀氏は、自らの目標に彼の写真を生かさなければならなかった。彼のためにポーズをとったパヴロワ、フォキネ、アルジェラノフのようなバレエ・アーティスト達によって、彼は助けられた。

彼がニューヨークに滞在している間、彼の写真に対する努力はよくなされた。しかし幾度か、肖像分野外の写真を提供するか撮影するよう頼まれることがあるのに気がついた。一九二三年に東京と横浜の大部分を破壊した地震(関東大震災)の直後、アメリカの新聞と雑誌編集者は、その惨事の前の関東地域を紹介する写真を探していた。ある写真エージェントが、何か使える写真がないか堀氏に電話した。堀氏はエージェントに使える写真はないが、日本から持ってきた何通かの絵葉書が唯一付け加えることができるかと話した。意気揚々としたエージェントは、絵葉書一枚につき三ドルで三ダース、全てを買った。

逆の事件は、ロング・アイランドで日本庭園を撮影しているときに起こった。堀氏は日本にいる間、決して庭の写真を撮影することはなかった。しかし彼のユーモアセンスに訴えたので撮影することにした。





堀氏は一九二〇年代後期におけるダンス写真の本を出版する予定だった。フォキネはその写真家の仕事を賞賛する序文を書いていた。しかしその本は出版されることはなかった。堀氏はその出版を残し、一九二九年に日本へ帰国した。しかし不況が数か月続き、計画は断念された。その本は決して出版されることはないであろう。堀氏自身の手によって日本へ持ち帰ったものと、アメリカから後で送り返されたその写真ネガは、一九四〇年の倉庫の火事により破壊された。残ったのは、堀氏の並はずれた写真の経歴の思い出となる数枚の写真だけであった。

堀氏はこの損失で大いに混乱することはなかった。彼は日本に帰国して断言した。「写真家堀は死んだ。私は画家として死ぬ」と。

ニューヨークにいた時でさえ、彼は毎年一・二月、写真館を閉めて油絵に専念した。彼のミニチュアチュア(細密画)は、一九一四年にニューヨークのナショナル・アカデミーでの展示によって一般に認められた。そして多くは、アメリカのミニチュアチュア・ペインター協会によってその次の年の展示を認められた。

彼は一九二九年と一九三〇年に三越アート・ギャラリーで展示したいくつかを思い出した。その展示から、アメリカ人が「真珠王」と呼ぶ御本名家の一人を含む、多くの油絵が売られた。

絵画を早い段階で学んだことが、彼の写真技術に役立ったと堀氏は認める。そして彼の四〇年間の写真経験は、彼がキャンパスに再現する主題の個性や性格、雰囲気を描けるのを援けている。

堀氏は、景色と肖像画のある洋風の部屋で仕事をする。しかしながら、洋風の部屋で仕事をする多くの他の日本人芸術家は、あまりにも西洋との関わりが少ないため、ひどく不利な条件を抱え、雰囲気と個性を表す

顔の輪郭の違いを知らない、と彼は感じる。

他の多くの人が引退の準備をする歳である七〇歳の堀氏は、まだ画家として好調である。観光客が世界一周の船旅で見る商店街である元町のはずれにある彼のスタジオで、堀は油絵を描く仕事と人生を楽しみ続ける。

最近彼は、「歴史的」有用性のために彼の写真の展示を許可した。しかし彼は、彼の油絵とミニチュアチュアの展示の依頼にずっと関心を持っていた。全て好評だった展覧会は、横浜と東京の軍教育センターで、そして横浜ニューグランドホテルで開催された。

(①左上) カストロ軍曹が電球の調節をする間、肖像写真を撮るためのポーズをとる堀氏。レンズの後で多くの年月を過ごした尊敬すべきカメラマンであり画家にとって、これは立場が逆である。

(②右上) 立場を変えて公平に。ボサボサ髪の堀氏は、第八軍の写真スタジオを訪問中、カストロ軍曹の肖像写真を撮ろうとしている。

(③右下) 写真スタジオ訪問の後で、横浜元町にある堀氏のスタジオへ行った。堀氏は最新のほとんど完成した自画像の油絵を見せてくれた。

(④中段左から1) パヴロワ・バレエ団の一員。ロシアの芸名を付けたイギリス生れのハルコート・アルジェラノフ。一九二四年撮影。

(⑤中段左から2) 一九二四年撮影のアンナ・パヴロワ。有名な踊り子であるパヴロワと彼女の率いるバレエ団の団員達は、堀氏が得意とする被写体だった。

(⑥中段左から3) 堀氏による写真研究の成果の一つ。アメリカ滞在中の有名な日本人役者である早川雪洲。

(⑦中段左から4) 堀氏のためにポーズを取るトルコ人ダンサー。一九二

六年撮影。踊り子は堀氏が得意とする被写体の一つであった。

(8) 下段左から1) エジプト人ダンサーの王女 *Notya Notka*。堀氏が最も多忙を極めた一九二五年に撮影。

(9) 下段左から2) ラビンドラナート・タゴールの神秘主義を本当に捕える肖像写真。一九二四年頃撮影。

(10) 下段左から3) しばしば堀氏のためにポーズをとったバレエダンサー。一九二二年撮影。堀氏は彼女を「マルセル」とだけ覚えていた。

(11) 下段左から4) エジプト人ダンサーの他の作品。一九二五年撮影。堀氏依頼人たちの大部分は舞台俳優であった。

右記事を箇条書きに整理すると次のようになる。

- 1 堀市郎は一九二〇年代、肖像や踊り子を撮影する著名な写真家だった。
- 2 第八軍写真研究所のエドワードL. シェイバー大尉、大尉の助手アーサージョーンズ中尉、研究所の肖像写真家ルーベン・カストロ軍曹の三人は、最近、軍教育センターで堀氏の写真を見て興味を持ち、堀氏を研究所へ招待した。
- 3 堀氏は研究所でまる一日を過ごし、新しいおもちゃで子供のような熱心さで機材とその扱い方を調べた。
- 4 堀氏の被写体は、アンナ・パヴロワ、ミッシェル・ホキネ、ハルコート・アルジェラノフ、ラビンドラナート・タゴール、チャールズ・ダナギブソン、ダイアナ・マナーズ、メアリー・ピックフォードなど様々。
- 5 一九二九年に帰国してから、写真界の進歩には関心を示さなかった。
- 6 堀氏は松江で生まれ、一二歳(数え年)で地元の写真家森田氏に雇われた。

7 二一歳(数え年)の時、「放浪熱が彼を襲い「私が見込んだアメリカへと導いた」」。

8 一九〇一年に「野心的な若い日本人」市郎はサンフランシスコへ到着。

9 サンフランシスコでは小さいスタジオで働き、後にミアチュア・ポトレイト社へと移った。この会社は、社名から細密肖像画の会社と判断される。サンフランシスコに頃から、ミアチュア制作に関わる仕事についていたことが判明する。

10 質素に生活して、お金を貯め、東海岸へ向けて旅立つ。

11 一九〇四年、セントルイスで家庭用肖像写真ビジネスの仕事始める。

著者は、「おそらくアメリカで最初ではないか」とする。

12 一年後(一九〇五年)ニューヨークへ行く。

13 「ニューヨークへ行つて、ニューヨークで一流の写真スタジオであるブラッドリーと共に仕事をする申し出を受け入れた」。市郎側の売り込みでなく、ブラッドリーが市郎に目をつけて申し出たものであるとする。これが事実とすれば、市郎がなぜニューヨークへいったのかの理由が、ブラッドリー氏の誘いということになる。ではブラッドリーがどのようにして市郎の存在を知ったのかは、今後の課題である。

14 市郎は多年ブラッドリー氏と共にした。

15 その後、暫くフリーで働き、一九一七年に自分の写真館を五番街六六五に開業した。これまで市郎の写真館は一九一二年開業と見られていたが、五年遅い年代である。一九一二年の根拠は、市郎の妹登久子の娘である佐々木節子「伯父のことも」『文化苑』よこはま文化苑編・刊、一九八三年八月)である。この部分は「シスコに四年<sup>三</sup>。いよいよニューヨークのブランド写真館の技師として就職できた。七年後、ニューヨークの五番街に自分のスタ

ジオをもつことができた。大正元年である。」と記す。ただ、佐々木氏の文章は、サンフランシスコ滞年在年を三年であるところを四年としたり、セントルイス滞在が抜けていたりしている。そのため記憶違いの可能性もある。市郎本人から聞いて記事にした、星条旗新聞の記述は、ブラッドリーと共に働いた後、一時期フリーのカメラマンとなったことまで触れており、より具体的である。また現在見つかっている、五番街の「堀写真館」の住所が追えるのが、一九一八年の『日米住所録』（日米新聞社、一九一八年）からなのも傍証となる。もし一九一七年に写真館を開業したとすると、市郎は数えて三九歳となり、市郎が細菌学者・野口英世に油絵具一式を贈った年にあたる。

16 「成功はあつたという間」だったという。「多くの名士」が肖像写真撮影のために写真館へ来た。

17 市郎の画家気質が写真に生かされている。

18 パヴロワ、フォキネ、Algeranoff (Harcourt Algeranoff, 1903-67, ロンドン生まれ。アンナ・パヴロアダンス団の一員) 等のバレエ・アーティストに助けられた。

19 ニューヨーク滞在中は写真の研究をした。何度か肖像以外の写真を頼まれた。一九二三年九月の関東大震災直後、アメリカの新聞と雑誌編集者は、震災前の関東地方の写真を紹介する写真を探していて、写真エージェントが使える写真がないか市郎に打診してきた。仕える写真はないが、日本から持ってきた何通かの絵葉書があると答えると、エージェントは一枚三ドルで三ダース(三十六枚)を買っていった。

20 もう一つは、日本に在る間、庭の写真を撮ることはなかったが、ロング・アイランドにある日本庭園を見て、市郎のユーモアセンスに訴えたので庭園を撮影した。佐野好作氏宅から見つかった市郎撮影写真群のなかでも、二点、

ニューヨークのセントラルパークと考えられるものと、ニューヨークの港と思われる写真があり、風景写真は意識的に撮影しなかったことが判る。

21 本の出版——一九二〇年代後期のダンス写真集を出版予定だったが、出版されることはなかった。ダンサーのフォキネも市郎の仕事を賞賛する序文を書いていた。出版を残し一九二九年に市郎は帰国した。しかし不況により計画は断念された。

22 そのネガは、堀氏自らの手で日本へ持ち帰ったものと、後でアメリカから送り返されたものがあつたが、一九四〇年の倉庫の火事で焼失した。残されたのは、堀氏の優れた写真の経歴が窺える数枚の写真だけだった。

23 この火事で市郎は狼狽せず、「写真家堀は死んだ。私は画家として死ぬ」と断言した。

24 ニューヨークでは毎年一・二月、写真館を閉めて油絵に専念した。彼のミニチュアチュア(細密画)は、一九一四年にニューヨークでナショナル・アカデミーでの展示によつて一般に認められ、多くはアメリカのミニチュアチュア・ペインター協会によつて次年度の展示が認められた(それほどの腕前であつた)。

25 一九二九年と三〇年に三越アート・ギャラリーで展示を行い、多くの油絵が売れた。その中には御木本幸吉氏も肖像もあつた。これまで、一九三〇年の展覧会のみ知られていたが、その前年にも開催されたことがわかる。

26 市郎自身、早い段階で絵画を学んだことが、彼の写真技術に役立ったと認めている。逆に四〇年間の写真経験が、その後彼が描く絵の主題の個性や性格、雰囲気を描えることに役立っている。

27 堀氏のアトリエと日本人芸術家——景色と肖像画のある洋風の部屋で仕事をする。多くの日本人芸術家は、あまりに西洋との関わりが少ないため

不利で、雰囲気と個性を表す顔の輪郭の差異を知らないと彼は感じている。

28 七〇歳であるが画家として好調で、油絵を描き人生を楽しんでいる。

29 最近、「歴史的」有用性のため写真の展示を許可した。本当は、油絵と細密画の展示依頼に関心があった。横浜・東京の軍教育センター、横浜のニューグランドホテルで開催された展覧会は全て好評だった。

30 一九五〇年に油絵で自画像を描いていた。

31 掲載の写真——カストロ軍曹。市郎の写真撮影風景。市郎が絵画を描く風景。ダンサー・アルジェラノフ（一九二四年）。ダンサー・パヴロア（一九二四年）——バレエ団の団員達は、市郎が得意とする被写体だったこと。川雪洲——市郎の写真研究の成果の一つと位置づく。トルコダンサー（一九二六年）——踊り子は市郎が得意とする被写体の一つ。エジプト人ダンサー。王女 *Noyta Noyka*（一九二五年）——一九二五年は市郎が最も多忙を極めた時期。タゴール（一九二四年頃）——神秘主義を本場に捕える肖像写真。ダンサー・マルセル（一九二二年）エジプト人ダンサー（一九二五年）——撮影依頼人の大部分は舞台俳優。

以上、市郎自身が語った右記事からは、多くの情報を得ることができる。

特に、帰国直前から帰国直後にかけて、一九二〇年代後期のダンサー写真を集めた写真集を刊行する計画があったが、不況により計画が頓挫、さらに不幸なことに一九四〇年に倉庫が火事となり、写真ネガが全て消失したことは、主要な作品の原版が現在伝わらない理由といえる。またサンフランシスコでは小さなスタジオやミニアチュア・ポートレート社で働いたこと、セントルイスでは家庭用肖像写真ビジネスをアメリカでも最も早い段階で始めていたこと、ニューヨークではブラッドリー氏と共に仕事をした後フリーとなり、一九一七年に自らの写真館を開業したことなど、いずれも新知見である。

【6】大学フォーラムでの絵画展示（一九一五年六月）

イギリスのタブロイド紙『THE SUN』一九一五年六月一七日（木）付三面に「NEAR EAST MEETS FAR WEST. (近い東方、遠い西方に出会う)」と題した、ニューヨークで開催された大学フォーラムの記事に堀市郎が登場する。記事は次の様に記す。

University Forum Hears Turkish and American Indian Readers.

The University Forum of America held an "open house" party last evening at its quarters, 550 West 113th street. Nicolas Agnides of Asia Minor gave readings and an explanation of the works of Nasraddin Hoja, the Turkish Homer, and Purshotam Bhudkamker of Bombay read the "Shakuntala" of Kalidas in the original Sanskrit. Princess Nadonis, who was formerly known as Princess Red-Feather, told legends and sang the songs of the Chippewa Indians.

The Forum exhibited several pieces of sculpture on "war" by American artists, as well as some of the paintings of Ichiro E. Hori, the Japanese artist.

(翻訳) 大学フォーラムは、トルコとアメリカインディアンの話者による話を聞いた。

アメリカの大学フォーラムは、昨晚、550 West 113th street の宿所で自宅開放パーティーを開いた。小アジアの Nicolas Agnides は、Nasraddin Hoja の作品の読みと解説をした。そしてボンベイの Purshotam Bhudkamker は、サンスクリット語で Kalidas の「シャクンタラ」を読んだ。王女赤い羽として知られていた Nadonis 王女は、伝説を語って、チペワインディアンの歌を歌った。

フォーラムは、日本のアーティストである堀市郎の絵はもちろん、アメリカのアーティスト達による「戦争」に関わる彫刻を展示した。

右記事によれば、大学フォーラムが開かれたのは、ニューヨーク・マンハッタンのもーニングサイド・ハイツにあるコロンビア大学のすぐ南である。市郎の住んでいたところに近い。この大学フォーラムで、堀市郎の絵が出品された。注目されることは、一九一五年段階で堀市郎が絵を描いていたことである。先に紹介した『星条旗新聞 太平洋版』一九五〇年七月一五日付記事にも見られる様に、市郎はニューヨークで一・二月、写真館を閉めて油絵に専念したとあり、絵画制作には写真と共に関心が強かった。早い段階から写真撮影だけでなく絵画も描いており、作品が大学フォーラムで展示される存在にまでなっていたことが判る。

### 【7】一九一八年の細密画出品

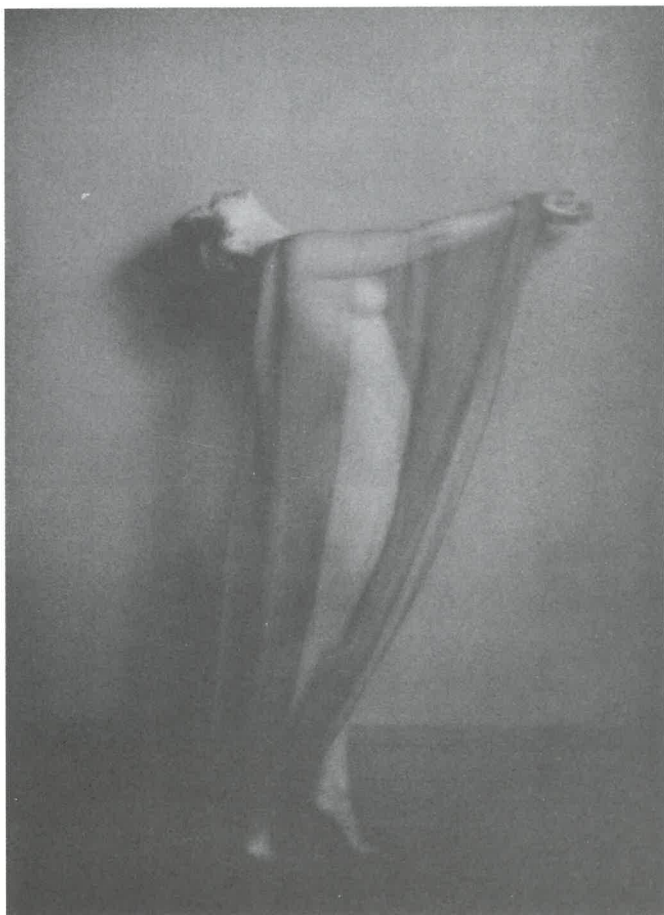
市郎は一九一四年からミニチュア（細密画）の展示を始めたことは、先の星条旗新聞に記す通りである。一九一八年一月三〇日に発行された『American Art News』(Vol. 17, No. 8, pp. 2)によれば、この年の二月一日まで、ニューヨークの五番街五九九番地のアーデンスタジオ (Arden Studios) で開催されていた「細密画家のアメリカ社会」展で「Ichiro E. Hori (堀市郎)」が細密画を出品していたことが判る。この年、二〇回目の年次開催を迎え、ニューヨークでも季節の注目される面白い展示の一つとして注目されていることを新聞記事は伝えている。

### 【8】「写真の開拓者」と言われたたヌード写真 (一九二二年一月・一〇月)

『SHADOWLAND』(アメリカ)一九二二年一月号の一六頁と同誌一〇月号の一

八頁に、それぞれ「FIGURE STUDY Photograph By Ichiro E. Hori」(一月号)、「FIGURE STUDY By Ichiro E. Hori」(一〇月号)とクレジットを付けて掲載するヌード写真がある(後掲の前者が一月号掲載写真、後者が一〇月号掲載写真)。「写真芸術」一九二二年(大正一二)三月号(第三卷第三号、写真芸術社)掲載の執筆者不明の「堀一郎の事ども」に、「雑誌 Vogue 及び Shadow Land に時々その作品を発表して、在米邦人の為に大いに気を吐いてゐる」とある記事を頼りに見つけ出した。「SHADOWLAND」は副題に「EXPRESSING THE ART」とあるように、芸術雑誌である。一九一九年に創刊、一九二三年まで刊行された。この『SHADOWLAND』は、INTERNET ARCHIVE (<http://archive.org/details/texts>)で公開されている(掲載写真の出典は同誌より)。





先に、一九一九年に自らの写真館で展示した布で覆われたヌード写真四枚は物議を醸し、市郎が「写真の開拓者」たることを示す事件であったことを紹介した(『星条旗新聞 太平洋版』一九五〇年四月二一日付記事)が、この写真はその二枚の可能性がある。市郎は写真館を開いた当初に、ヌード写真を展示してそれが話題になったというから(拙著『野口英世の親友・堀市郎とその父櫛山』一五五頁)、右記事からも写真館の開業は、一九二二年ではなく一九一七年なのではないかと考えられる。

【9】ダンサー ロシヤナラ (オリブ・クラドック) (一九二二年一月) 『SHADOWLAND』(アメリカ)一九二二年一月号の二二頁には、「ROSHANARA」とタイトルのある写真があり、写真右下に「Photograph by Ichiro E. Hori」

「写真の開拓者」堀市郎の研究(西島)

とある。タイトル下に「A new camera study of the brilliant young interpreter of native Burmese and Indian dances (生粋のブルマとインドダンスのきらめく若い演出者を新しいカメラで撮影した習作)」とある。被写体は、オリブ・クラドック (Orive Craddock、一八九四—一九二六)で、インド人の血を引く父とイギリス人の母を持つダンサーで、伝説的なインドの女王ロシヤナラを芸名とした。一九二二年にアンナ・パヴロワのバレエ団に加わり、アメリカに暮らす三歳で虫垂炎により亡くなった。この写



真は彼女が二九歳頃の写真である。市郎が懇意にしたパブロワ・バレエ団の一員を撮影していることから、一九二〇年頃には既に市郎とパブロワ・バレエ団との関わりがあったことがわかる。

【10】映画俳優 早川雪州 (一九二二年二月) 『MOTION PICTURES MAGAZINE』(アメリカ)一九二二年二月号、五四頁に、「The Gentleman From Japan (日本から来た紳士)」と題する頁に掲載され、写真に左下に「Photograph By Ichiro E. Hori」とある(掲載写真の出版は同誌45)。「MOTION PICTURES MAGAZINE」は、一九一一年創刊、一九七七年



まで刊行され、INTERNET  
ARCHIVE ([http://  
archive.org/details/  
texts](http://archive.org/details/texts)) で公開されている。

【11】ファッション雑誌『ヴォーグ』のフランス版に女優マアリー・ピックフォード及び足先の靴の写真を掲載(一九二二年三月)

『VOGUE (France)』第四号に、市郎撮影の「Les Elegances」[Robes portées par Mary Pickford (マアリー・ピックフォードのドレス姿)](二六一―二七頁) 五点の他、「Nos chaussures ont un charme exotique (私達の靴にはエキゾチックな魅力がある)」(二八一―二九頁)と題し、市郎撮影の足元の靴を撮影した作品八点を掲載している。いずれも「Ichiro E. Hori」とクレジットがある。マアリー・ピックフォード (Mary Pickford 一八九二―一九七九) は、カナダ・トロント出身の女優で、サイレント映画時代の大スターである。

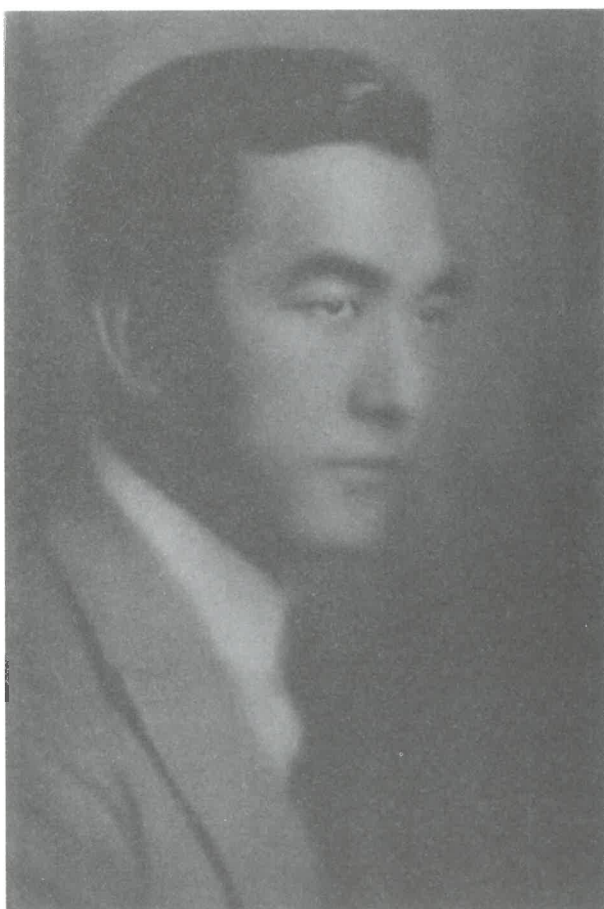
市郎にとって一九二〇年代は、それまでの写真研究の集大成の時であると共に、最ももてはやされた黄金期といえよう。一九二二年一月からアメリカの映画雑誌『SHADOWLAND』に役者の写真が掲載され、『SHADOWLAND』と同じ出版社から出た『MOTION PICTURES MAGAZINE』(アメリカ)にも一九二二年二月から写真掲載が始まる。フランスの『VOGUE』掲載は、まさにそのような時期のものであり、このファッション雑誌では、女性の足元と靴のみという、他の市郎撮影の写真には見られないものが掲載されている。

【12】映画俳優 早川雪州(一九二二年五月)

『MOTION PICTURES MAGAZINE』(アメリカ)一九二二年五月号、一六頁に掲載されるもの。写真右下に「Photograph By Ichiro E. Hori」とある。写真下には「SESSUE HAYAKAWA」とタイトルがあり、次の解説をつける(掲載写真の出典は同誌より)。

The distant East- romance, mystery and exotic color! This, Sessue Hayakawa of the ivory-tinted skin and almond eyes has brought to the silver-cloth. And, at the same time, he has created innumerable worthy roles

(翻訳)遠い東方の―ロマンス、神秘とエキゾチックな色をもつ早川雪州。象牙色の肌とアーモンド色の目をもつ彼が、銀幕にやってくる、数えきれない価値ある役を演じた。





【13】ダンサー ローレント・ノヴィコフ（一九二二年九月）

『SHADOWLAND』（アメリカ）一九二二年九月号、一七頁に掲載され、作品右下に「Photo By Hori」とある。タイトルは「LAURENT NOVIKOFF（ローレント・ノヴィコフ）」。その下に「A vivid personality lends much to the



interpretative quality of his subtle art (真に迫る個性は、彼の鋭い芸術の本質を説明するのに役立つ)」と解説が入る（掲載写真の出典は同誌より）。ノヴィコフは、市郎が日本への帰国前後に出版しようとした市郎撮影のダンサー達の写真集に、市郎の仕事を賞賛する序文を寄せた人物である。

is deceptively veiled in grace

（翻訳）投げやりを構え、防御の姿勢をとる戦士は、戦いに身を投じるか、戦闘を表現するおかしな踊りをする準備ができていいる。彼は洗練さのなかに隠された強さがある。



【15】ダンサー チャールズ・ワイドマン（一九二二年二月）

『SHADOWLAND』（アメリカ）一九二二年二月号、二六頁に載る写真で、写

真左下に「Study of Charles

Weidman by Hori（堀氏によるチ

ャールズ・ワイドマンの習作）」

とある作品である。チャール

ズ・ワイドマン（一九〇一—七

五）は、アメリカのモダンダン

スの先駆者の一人で、振付師で

ありモダンダンサーでもある。

掲載写真のやぎ下に「PIERROT

【14】東洋の軍事ダンス（一九二二年一月）

『SHADOWLAND』（アメリカ）一九二二年一月号、三四頁の記事で、上下に二枚の写真が掲載されている。上写真の右側に記されたタイトルは、「The Warlike Dance of an Oriental（東洋の軍事ダンス）」とあり、その下に「Special Photographs by Hori（堀氏による特別な写真）」とある。上写真のすべ下に解説がある（掲載写真の出典は同誌より）。

With his javelin poised and his shield in position the warrior is ready either to fling himself into battle or whirl himself into the mad dance that expresses conflict. He typifies strength, which



SINGS/By Horols Vinal」および「Horols Vinal による「レトロは歌う」と題する次の詩を載せる(掲載写真の出典は同誌より)。

I heard a bird in an almond tree/ Thrilling deep and long/  
Oh, it must be a starry thing/ To break one's heart with song!  
Tho I have singing things to give, /Heart-fire and ecstasy—/  
I cannot trill a golden note/ Or shake on almond tree.

【16】ヘンゼルとグレーテル(一九二三年二月)

『SHADOWLAND』(アメリカ)一九二三年二月号、一三頁に載る。写真右下に



記載されるタイトルは「GRETCHEN AND HANS (ヘンゼルとグレーテル)」。写真左下に記された注記は、「Posed for Horri by members of the Pavlova Ballet」とあり、アンナ・パヴロワバレエ団の団員が、市郎のためにとったポーズであることが判る。また、この佐野好作氏所蔵の市郎撮影写真で、先の松江歴史館での展覧会で「踊る二人」と仮題を付した写真(図録『松江藩士の息子画家になる。孫写真家になる』三八頁掲載No.91写真)は、この被写体を後ろから写したもので、一九二二・二三年頃撮影されたものと判断される(掲載写真の出典は同誌より)。

【17】ダンサー ロサ・ローランド(一九二三年二月)

『SHADOWLAND』(アメリカ)一九二三年二月号、二二頁に掲載された写真で、



写真下に「Hori」とあることから、堀市郎撮影の写真であることが判る。写真左に「ROSE ROLANDA」とあり、ニューヨークでも活躍したダンサー兼振付師であるロサ・ローランドである。タイトルの下に解説がある。

Whose vivid personality and artistic dancing have won her an enviable host of admirers. At present Miss Rolanda is one of the stars of the "Music Box Revue" in Chicago.

(翻訳) 強烈な個性と芸術的な踊りで、彼女はうらやましい多数のファンを得た。現在、ローランド氏は、シカゴの「オルゴール・レビュー」のスターです。

### 【18】女優ヴァレリエ・カールソン (一九二三年二月)

先のロサ・ローランドの写真の下に掲載された写真。写真の右に「VALERIE CARLSON」とタイトルがあり、その下に解説を記す(掲載写真の出典は同誌より)。

One of the most beautiful women on the English stage, and an actress of great talent. She is the daughter-in-law of Henry

Arthur Jones, the famous English playwright

(翻訳) 英国のステージで最も美しい女性の一人で、大きな才能をもった女優である。彼女は、有名な英国の脚本家ヘンティ・アーサー・ジョーンズの息子の妻である。



【19】ダンサー ドリス・ハンフリー「スカーフダンス」(一九二三年二月) 『SHADOWLAND』(アメリカ)一九二三年二月号、四六頁に載る写真。この号には、市郎の写真が四枚掲載された。写真下にタイトルを「THE SCARF DANCE」と記す。右下に「Camera study of Doris Humphrey by Hori (堀氏による) ドリス・ハンフリーのカメラ研究」と注記がある。ドリス・ハンフリー(一九一五—一九五八)はアメリカのダンサーであり振付師で、モダン・ダンスの開拓者の一人である。この写真は、シンプルな中に動きのある写真として、市郎の写真の特徴が窺える一枚である。「Camera study」とあるように、市郎の実験的な研究成果を示す(掲載写真の出典は同誌より)。



【20】インスピレーション(一九二三年四月)

『SHADOWLAND』(アメリカ)一九二三年四月号、六〇頁掲載の写真で、写真

下に「INSPIRATION(インスピレーション)」と題を載せる。題下に「Symbolic Study by Hori」と注記があり、市郎の「象徴研究」の一つである(掲載写真の出典は同誌より)。



【21】早川雪洲の妻で女優の青木鶴子(二点)

青木鶴子(あおき つるこ、一八九二—一九六一)は、無声映画時代にアメリカで活躍した日本出身の国際女優。川上音二郎の姪で、俳優・早川雪洲の妻でもある。『セッシュー!』(講談社、二〇一二年)の著者・中川織江氏の指摘による。この二点の写真は、二〇一三年四月一三日(土)に東京・六本木ヒルズのハリウッドプラザ五階のハリウッドホールで開催された、講演とトークライブ「セッシュー物語——講演と映像で雪洲の謎を解



く scene.1」で、青木鶴子として複写写真が展示された。中川氏が雪洲の生涯を、メディアプロデューサーの澤田隆治が映像を交えて当時の映画界を紹介した。左写真は、『松江藩士の息子画家になる。孫写真家になる。』展図録の付録 p. (34) — 上写真、p. (75) — 下写真である。いずれも佐野好作氏所蔵。

【22】市郎の部屋で、野口英世と一緒に将棋を指した三星美磨次

ニューヨークの市郎の家をよく訪れ将棋をさした「ミツボシ」某(拙著『野口英世の親友・堀市郎とその父櫟山』一八五頁)は、一九二一年の『紐育日本人名録』(紐育市日本人社刊)に「三星美磨次 Mitsuboshi Mimaji, 51 East 42 St. Murray H. 8322」あるから、「ミツボシ」は三星美磨次であることが判る(新井涼子氏の教示による)。三星氏は広島出身の歯科医で、一九八八年生まれ、一九〇八年に渡米した人物である。なお、右人名録によれば、この時、野口英世は三八一 Central Park West に住み、「堀一郎写真館」も掲載されている。

【23】市郎の妹・登久子と従姉妹の勇子の写真(一九一一年頃)

図録『松江藩士の息子画家になる。孫写真家になる。』三四頁、No. 八〇の堀登久子肖像写真で、登久子氏の左側に立つ女性は、登久子の姪・小勇であることが判った。小勇は一八九〇年生まれで、登久子より四歳若い。三谷鍊二郎の次女で、「勇子」と呼ばれていた。小勇の次男の妻和子氏が企画展を見て祖母だと気づいた。佐野稔夫・新井涼子両氏から教示を得た。新井氏は、登久子が左手薬指に指輪をしている点から、婚姻届を出した一九一一年に撮影され、結婚報告に松江を訪れた(松江・旭写真館で撮影)時ではないかと見

る。よって前稿「堀樫山・市郎父子に関する新発見」〔松江歴史館研究紀要〕  
三〇八〇頁下段で、この女性を堀キク子ではないかとしたのは訂正する。

## 二 ニューヨーク現地調査

二〇一三年三月、私はニューヨークを訪れ、堀市郎・野口英世関係の現地調査を行った。その報告は次の通りである。ニューヨークは古い建築物が多く残っており、市郎に関する場所や建物を見つけ出すことが出来た。

**マンハッタンアベニュー一番地のアパート跡** 堀市郎がニューヨークで居住したのは、マンハッタンのアッパー・ウエスト・サイドの「1 Manhattan」である。掲載写真の手前の空地が、堀市郎と野口英世が住んだアパートの跡



手前の空地に、堀市郎と野口英世が住んだアパートがあった。  
2013年3月 西島撮影（以下の写真は全て西島が撮影した）

され、結婚報告に松江を訪れた（松江・旭写真館で撮影）時ではないかと見

地である。写真中、自動車が進ましている通りがマンハッタン通りで、通りを挟んで向かいの建物の端（南側、写真右側）が二番地である。向かいの建物の下の入り口には、南から北へ向かって各入口に、古いプレートで「2」「4」「8」「10」とあり、道路を挟んで交互に番地が配列されていたことがわかる。また向かい建物の六階部分は、その下の部分と形状が違うため、建て増ししたと考えられ、建物自体は古い。市郎が住んだアパートは最上階の五階だったので、同じ形式の建物が手前に並んでいたものと思われる。

**職場までのルート** 現地を歩くとすぐ気付くことであるが、市郎のアパートはセントラルパークのすぐ隣である。そこからセントラルパークを東へ横切った出口が、そのまま南北に延びる五番街（Fifth Avenue）であり、ひたすら南へ向かえば、最初の職場であるブラッドリー写真館にも、堀写真館にも行き着くことができる。歩くと恐らく四〇〇五〇分くらいであろう。この通り沿いに、市郎が通った学校ナショナル・アカデミーがある。また帰りは、職場からすぐにブロードウェイを通り、セントラルパーク西側を南北に通るセントラルパーク・ウエストをひたすら北上すれば自宅につくことができる。ブロードウェイの舞台では、市郎撮影のポスターが貼られることがあり、また夜のセントラルパークを歩くのは治安上危険なので、帰り道にブロードウェイを通ったと見るのが自然であろう。

**市郎撮影の風景写真はセントラルパーク** 市郎はほとんど風景写真を撮ることはなかった。現存するものも佐野稔夫氏所蔵の二点のみである。そのうちの一点（松江歴史館展示図録、付録No.（76））には、裏に「当市公園の雪の朝」と自筆で記している。この写真の撮影地点は特定できなかったが、明らかに岩や木々のあり方やタイトルから、セントラルパーク内の写真と判断できる。

ブラッドリー写真館跡

市郎がニューヨークに来て数年間勤めたブラッドリー写真館は、マンハッタンのミッドタウン・イーストの「435 Fifth Avenue」にあった。



ブラッドリー写真館が入っていたビル

市郎が写真館を開いた同じ五番街にある当時の建物と思われる古い建物が現在でも現地に残る。意外に小さいビルである。

オフィスの窓際の一室と考えられる。

市郎が通ったナショナル・アカデミー ナショナル・アカデミーは、市郎が一九一六年一〇月から一七年にかけて在籍していた伝統のある美術学校である(1083 5th Ave.)。写真館を一九一七年に開業したとすると、開業直前にここで美術を学んでいたことになる。



ナショナル・アカデミー美術館



学校の入口

ミニユアチュア(細密画)を展示したギャラリー

①カネイドラーのギャラリーが入っていたビル 一九二三年二月二六日から三月一〇日まで「細密画家のアメリカ社会」展が五番街五五六番地にある



カネイドラーのギャラリー

(the Galleries of

M. KNOEDLER & Co) で開かれ、

市郎は「森村男爵」を出品した。古い建物で、六階以上は建て増しと思われる。現在はフィリピン総領事館

(CONSULATE GENERAL OF THE

PHILIPPINES) となっている。

②ウィリアム・マクベスのギャラリーが入っていたビル マンハッタンの「15 East 57th Street」にあるウィリアム・マクベスのギャラリー (the

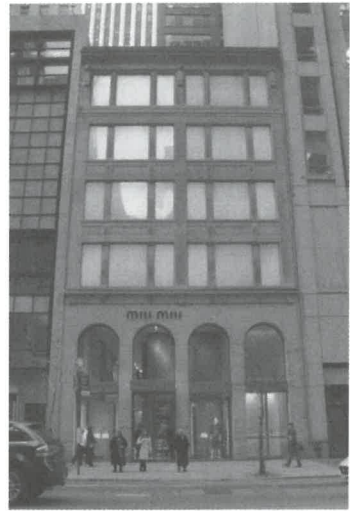
45』(Harry N. Abrams, Inc' 二〇〇四年)に掲載されている。市郎の写真館は、市郎撮影のいくつかの写真写真に写る窓の形から、四階以上の



現在の Rolex ビル



掘写真館跡(右前)から五番街を南に望む。ブラッドリー写真館跡方面



Galleries of WILLIAM  
MACBETH, INC) で開催された

「細密画家のアメリカ社会」

展に、一九二八年一月二四日から二月六日の二九周年記念展では、「Mrs. Frankel」と題する細密画を、一九二六年一月五日から一八日の同展では

「徳川侯」を市郎は出品した。五番街の目抜き通りで、建物は古い。現在はブラダの姉妹ブランド ELLERRE が入る。

市郎と親交のあったウッドローン墓地の野口英世・高峰譲吉の墓

ニューヨークのはずれ、地下鉄四番線の終着点がウッドローン墓地で、ここには市郎と親交のあったニューヨークで活躍した細菌学者の野口英世（一八七六一一九二八）と、市郎撮影の写真があるアドレナリン製法を発明した科学者である高峰譲吉（一八五四—一九二二）の墓がある。



野口英世と妻メリー・ダージスの墓



高峰譲吉の墓

## おわりに

堀樫山・市郎父子に関わる調査を始めて三年余りになる。わずか三年でここまで詳細にわかってくるとは思ってもみなかった。二回にわたり、展覧会開催後の新知見を公表したのも、展覧会開催に合わせ調査・分析を急いだため、調査が不十分であったためである。不十分な点は残したものの展覧会を開催したことで、堀樫山・市郎父子の業績が初めて人々に認知され、松江以外でも展覧会が開催され、不明であった市郎撮影の人物の人名の特定にも繋がった。展覧会開催中に明らかになった市郎撮影の「新渡戸稲造肖像写真」

（佐野好作氏所蔵）は、その後、滝澤哲哉著『新渡戸稲造武士道の売国者』（成甲書房、二〇一三年三月刊）の表紙に使われ、徐々に、そして確実にその存在が認知されてきた。本稿で見たとように、市郎に関する在外史料は数多くあることが判ってきた。このことは、市郎の活躍の場が海外であり、その評価も日本ではなく海外で高かったことによる。今後、「写真の開拓者」と言われた日本人写真家・堀市郎の存在を、写真史のなかに位置づけていく作業が求められよう。

本稿のまとめとして、展覧会后、明らかになった諸事実を「堀家関連年表」にゴシック体で示し、いくつかの誤りと新知見をまとめておく。

（にしじま・たろう 松江歴史館学芸員）

（付記）堀市郎撮影写真の掲載をご許可いただいた堀智子氏、チャーチ・オ

ブ・ゴッド川崎教会、いつも情報をいただく佐野好作、佐野稔夫、

佐野博史・みゆき夫妻、佐々木寛子、新井涼子各氏には、記して謝

意を表します。

(追記) 成稿後、新たに判明した事実を左に記す。

1 堀市郎がニューヨークの富豪で親日家であるサースビー家に出

入りし、後に同家の跡取りとなる西大井久太郎を紹介したことが、

福井県立美術館学芸員の佐々木美帆氏の調査で明らかになった

(佐々木「海と福井と岡倉天心——天心にまつわる拾遺集——」

〔図録『福井県立美術館平成二五年度企画展 生誕一五〇年・没

後一〇〇年記念「岡倉天心展」——大観、春草、近代日本画の名

品を一堂に——』福井県立美術館、二〇一三年一〇月に収載)。

佐々木氏の論考及び、同図録に再録された石黒敬七「一世を貫く

日米親善譜紐育の大富豪にして稀世の親日家サースビー老嬢と其

嗣子となった「日本紳士西大井氏の物語」(『ニッポンとアメリカ

カ』ニッポンとアメリカ社、一九三八年一月)によれば、世界

的なオペラ歌手のエマ・サースビー、アイナ・サースビー姉妹は、

岡倉天心やその弟子たちのパトロンであった。福井県越前市出身

の西大井は、大正七年(一九一八)以降のある時期からニューヨ

ークのルーズワイルズ・ビスケット社の工場で働いていたが、堀

市郎と知り合い、堀の紹介で翌八年にハウスキーパーとしてサー

スビー家に雇われる。その後、サースビー家を継いだ西大井の手

により、天心ら関係史料等のコレクションが日本へ運ばれること

となった。また、ニューヨーク歴史協会のエマ・サースビーの名

刺コレクションに、市郎の名刺が今も保存されているとのこと

ある。

2 堀市郎撮影ロサ・ローランド写真二枚

市郎撮影のダンサー、ロサ・ローランドの写真二枚(補1・2)

を入手したので紹介しておく。この写真は二枚とも、右下に「ICHIRO

E. HORNER」と写真枠内に白字でクレジットが写し込んである。こ

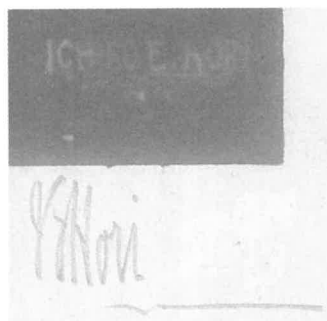
の白字のクレジットは従来知られておらず、新出である。また二枚

共(補1・2)、右下の枠外に市郎直筆による市郎撮影の写真によく

みられる鉛筆サインがある。



補1



補1の右下にあるクレジットとその下に記された市郎の鉛筆サイン





補2

### 堀家関係年表

和 暦	西暦	事 件	堀 家 の 動 き	良蔵 年齢	樺山 年齢	市郎 年齢
寛永2	1625		市郎兵衛(初代)、会津藩主藩生忠郷に仕える。猪苗代都沢に給地を得る			
寛永4	1627		市郎兵衛(初代)、若狭小浜藩主京極忠高に仕える			
寛永15	1638		市郎兵衛(初代)、出雲松江藩主松平直政に仕える			
弘化2	1845		良蔵(9代)、堀市郎右衛門(8代)の養子となる	17		
安政3	1856		良蔵の長男宗太郎(樺山)、松江の外中原で生まれる	28	0	
文久3	1863		良蔵、藩から軍艦運用修行を命ぜられ、八雲丸乗組員となる	35	7	
元治元	1864	第一次長州征討	宗太郎(樺山)、祖父市郎右衛門(8代)に就いて日本画を学ぶ	36	9	
慶応3	1867	王政復古の号令	宗太郎(樺山)、阿羅波比神社の「御的式」に加わり、その様子を写す	39	11	
明治元	1868	明治維新。戊辰戦争		40	12	
明治2	1869	版籍奉還	良蔵、堀家家督を継ぐ	41	13	
明治3	1870	兵制を統一	良蔵、藩から陸軍所書記、次いでお雇い外国人フレットの下での砲隊伝習修行を命ぜられる 宗太郎(樺山)、お雇い外国人アレキサンドルの下で語学修行を命ぜられる	42	14	
明治4	1871	廃藩置県	良蔵、砲隊伝習修行を罷免	43	15	
明治7	1874		良蔵、隠居。宗太郎、堀家家督(10代)を継ぐ	46	18	
明治12	1879		宗太郎(樺山)の長男市郎、松江の外中原で生まれる	51	23	0
明治16	1883		宗太郎(樺山)、小豆澤亮一(碧湖)に洋画を学ぶ	55	27	4
明治17	1884		宗太郎(樺山)、第2回内国絵画共進会に出品(4月) 県へ和洋画学校設置申請(9月) 西茶町に島根県初の私立和洋画学校「方園学舎」を開校(12月)	56	28	5
明治18	1885		宗太郎(樺山)、師範学校・中学校の用務教員となる(11月)。画学校を開校	57	29	6
明治19	1886		宗太郎(樺山)、師範学校・中学校を辞任(7月)	58	30	7
明治20	1887		宗太郎(樺山)、「松江画工」として活動	59	31	8

明治22	1889	松江市市制施行	宗太郎(樺山)、第1回島根県私立教育会教育品展覧会に出品	61	33	10
明治23	1890		宗太郎(樺山)、第3回内国勲業博覧会に出品 市郎、松江市尋常小学校を卒業。殿町の森田写真館で写真修行を始める 小泉八雲と出会う	62	34	11
明治29	1896		市郎、小泉八雲の美保園行きに同行する	68	40	17
明治30	1897		市郎、松江を立ち、上京(1月) 市郎、神田淡路町の江木写真館で技師・渡部進に師事 市郎、東京牛込の小泉八雲宅を度々訪れる 宗太郎(樺山)、県から「島根県重要水族誌」掲載の魚図制作を依頼される	69	41	18
明治33	1900	野口英世、渡米		72	44	21
明治34	1901		市郎、横浜を出航し、アメリカ・サンフランシスコに到着(2月) 仕事を小さなスタジオで見つけ、後にミニアチュア・ポートレート社へと移る 宗太郎(樺山)、第1回島根県物産共進会に出品(8月)	73	45	22
明治35	1902		宗太郎(樺山)、3か月間、島根県農林学校の教務補助となる	74	46	23
明治36	1903		市郎、セントルイスへ移る	75	47	24
明治37	1904	日露戦争	市郎、万国博覧会の日本国旗を描く 市郎、家庭用肖像写真ビジネスの仕事始める	76	48	25
明治38	1905		市郎、ニューヨークへ移り、ブラッドリー写真館の技師となる	77	49	26
明治41	1908		市郎、ヘボン博士邸を訪れる	80	52	29
明治42	1909		宗太郎(樺山)、逝去	81	53	30
明治44	1911		市郎宅の隣室に、野口英世夫妻が引っ越してくる	83		32
大正元	1912		市郎・野口英世・桑原羊次郎、コニーアイランドに遊ぶ	84		33
大正2	1913	英世、麻痺狂患者から梅毒スピロヘータ発見 第一次世界大戦		85		34
大正3	1914		市郎、ナショナル・アカデミーでミニアチュア(細密画)を展示し認められる			35
大正4	1915		市郎、大学フォーラムで絵画を展示			36
大正5	1916		市郎の妹・登久子、渡米 市郎、翌年にかけて国立デザイン・アカデミーに通う	88		37
大正6	1917	英世、腸チフスで入院。 シャンデーケンで静養	市郎、ニューヨーク・マンハッタンに黒写真館を開業 良蔵、逝去 市郎、英世に油絵具一式を贈る	89		38
大正7	1918		市郎作成の東郷平八郎肖像細密画が「ニューヨーク・タイムス」で賞賛を博す			39
大正8	1919		市郎、黒写真館で布で覆われたヌード写真4枚を展示。反響が大きく、「写真の開拓者」と言われる			40
大正11	1922		市郎、英世と血闘守之助の写真、ダンサーのマルセルを撮影 市郎、ファッション雑誌「ヴォーグ(フランス)」に写真を掲載 市郎、映画雑誌「シャドウランド」「モーション・ピクチャー・マガジン」に写真掲載			43
大正12	1923		市郎、ダンサーのロサ・ローランドを撮影			44
大正13	1924		市郎、ダンサーのアンナ・パヴロワ、ラビンドラナート・タゴールを撮影する			45
大正14	1925		市郎、エジプト人ダンサーの王女Noyta Noykaを撮影する			46
大正15	1926		市郎撮影の早川雪洲写真、「ニューヨーク・タイムス」に掲載			47
昭和3	1928	英世、ガーナで逝去				49
昭和4	1929		市郎、世界一周して帰国 市郎、自ら撮影したダンサーの写真集刊行を計画			50
昭和5	1930		東京三越で「境市郎氏洋画展覧会」開催 市郎、写真家をやめ洋画家となる			51
昭和8	1933		市郎、東京中目黒に洋風の家を建てる			54
昭和12	1937		市郎、ダゲレオタイプ発明百年祭で写真功労者として表彰される			58
昭和13	1938		市郎、野口英世記念会の設立に評議員として貢献			59
昭和14	1939	野口英世記念館開館				60
昭和15	1940		市郎、倉庫の火事によりアメリカで撮影した写真ネガを消失する			61
昭和16	1941	太平洋戦争始まる				62
昭和18	1943		この頃、市郎、神奈川県大磯に自宅を移し、横浜元町にスタジオを開く			64
昭和20	1945	終戦				66
昭和22	1947		市郎、洗礼をうける			68
昭和24	1949		市郎、横浜元町のスタジオを自宅兼用とする			70
昭和25	1950		横浜・東京のアメリカ軍教育センター、横浜のニューグランドホテルで市郎撮影の写真・油彩画・ミニアチュア(細密画)を展示する展覧会が開催される			71
昭和30	1955		市郎、シエルホン牧師主催のチャーチ・オブ・ゴット会堂移転を援助			76
昭和33	1958		市郎の妹・登久子、逝去			79
昭和35	1960		市郎、野口英世肖像画をアフリカ・ガーナの日本大使館へ寄贈			81
昭和42	1967		市郎、養女響子と共にアメリカを旅行			88
昭和44	1969		市郎、逝去(1月)。勲五等・雙光旭日章の叙勲			(89)